“夢があるから人生は輝く”

■大須賀健教授「林忠四郎賞」受賞

小学生の頃に読んだ本で、宇宙の広さや星が輝く仕組みを知り、宇宙を支配する物理法則を学んでみたいと考えた。

これは、先日、国内天文学の最高賞「林忠四郎賞（22年度）」を受賞した、にかほ市出身の宇宙物理学者　大須賀健　筑波大学教授のインタビューコメントです。

その研究内容は「コンパクト天体周囲の降着流と噴出流の先駆的シミュレーション研究」、いわゆるブラックホールに関する研究で、ものすごい重力を持ち光すらも飲み込んでしまう謎の天体ブラックホールの姿をコンピューターシミュレーションによって解明しようとするものです。

とまあ、あたかも知っているかのように説明をしていますが、正直、大須賀先生の研究はとても難しく、ちょっとやそっとで理解することはできません。ですので、ここでは、そんな異次元の研究で最高賞を受賞された大須賀先生の偉業を称えつつ、今後のさらなる活躍を祈念するにとどめたいと思います。

■夢のきっかけ

ところで、大須賀先生が研究者になったきっかけは何でしょうか。それは子どものころに読んだ一冊の本だったことが冒頭のコメントからわかります。つまり、大須賀先生の研究者としてのはじめの一歩は、本を読んで抱いた子どものころの純粋な好奇心だったのです。

同じように、すばらしい取組みをしている他の人たちのはじまりのきっかけを調べてみると、そのほとんどがやはり子どものころのちょっとした出来事だったように思われます。

たとえば、にかほ市の偉人、白瀬矗もその一人です。彼が極地探検を志したのは11歳です。そのきっかけは、当時彼が通っていた寺子屋の佐々木節斎先生の北極の話がきっかけでした。また、昨年、植村直己冒険賞を受賞した、皆さんご存知のプロ冒険家、阿部雅龍さんもそうです。彼が冒険家に憧れるようになったきっかけは10歳の時に母親に買ってもらった本でした。

■夢のその後

私たちのだれもが、子どものころに何かしらの夢を抱いていました。ただ、その夢をそのまま実現したという人はわずかです。たぶん多くの人は子どものころの夢をそっと引き出しの中にしまい込んでいると思います。ただ、たとえそうであったとしても、その夢が大人になれば消えてしまうということはありません。むしろ子どものころの夢は、将来親になったときに遠くを見つめながら子どもに話しかけることのできる物語になったり、大人になってから友人とお酒を酌み交わすときの思い出話になったりするものです。子どものころの夢は、時とともに、叶えるべき夢から伝えるべき夢へと変化しながら生きつづけていくのです。

■夢を持つことは

夢を見つけるための機会はたくさんあります。それは本、テレビ、SNSといった媒体、スポーツや職場体験といった実体験、家庭、学校、遊びといった環境などさまざまです。大切なのは、その機会がすべての子どもたちにひとしく準備されていることです。私たちの暮らす社会は必ずしも平等ではありません。むしろ、暮らしている場所や育った環境によって夢を見る機会にも差がうまれてしまいます。だからこそ、私たちはその差を小さくする努力をしてあげなければならないと思います。

このコラムは5月5日子どもの日に書きました。コラムのタイトル「夢があるから人生は輝く」はモーツァルトの言葉です。決して面倒くさい話をしているのではありません。私たちのだれもが夢を持つことの素晴らしさを知っているはずです。だからこそ、すべての子どもたちが憂いなく夢に向かって進んでいくことができる、そんな社会をつくりあげていきたいと思うのです。

にかほ市長
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。